

第12回東南アジア分科会 議事録

日時: 2009年6月18日(木) 10時30分～12時

場所: 東京文化財研究所 第一会議室

出席者: 上野邦一、坪井善明、布野修司、友田博通、中川武、宮崎恒二(以上、東南アジア分科会委員)、成田剛(特別報告)、田中健太郎、堀敏治(以上、文化庁)、守山弘子(外務省)、海老原周子(国際交流基金)、清水真一、岡田健、二神葉子、友田正彦(以上、東京文化財研究所)七海由美子、原本知実、田代亜紀子、小角由子、土居香菜子(以上、文化遺産国際協力コンソーシアム)

1. ワット・プーおよびプレア・ヴィヒアの現況について

成田剛(日本工業大学)

報告: プレア・ヴィヒア、ワット・プー、パノム・ルンという3つの遺跡が、アンコール王朝時代に山の斜面を利用して建築された代表的3つの寺院である。パノム・ルン遺跡については、既にタイ政府により修復が終了している。ワット・プーについては、19世紀末、既に文献上名前がでてきている。1901年、1907年出版文献には図面が掲載されているが、1939年出版文献のパルマンティエ調査に基づいた図面が詳しく、復原図もでていいる。1989年以降は、上野邦一による発掘調査、続いてフランスとイタリア隊による発掘調査も行われている。フランス・イタリア隊調査では、ワット・プーのみではなく、河岸に位置する古代都市といわれる場所の発掘もおこなっている。1996年からは早稲田大学西村正雄を中心にユネスコ・プロジェクトとしてワット・プーの保存管理計画作成のための調査が実施された。この成果として、寺院背後の山から流れる水に対する排水計画の提案がなされ、古代都市に関する詳細な図面も作成された。加えて、ピエール・ピシャール博士により、「南の宮殿」、「北の宮殿」とよばれている建物の崩壊状況について調査と修復設計提案がなされた。2001年～2003年にはJICAが①排水路建設計画②出土遺物保管庫(ラオス側の要望で結局展示施設的な役割を担うようになる)の建設③測量機材などの修復関係機材供与④保存修復専門家の人材育成(ナンディン祠堂の基礎発掘調査や測量技術などの移転)という4つの柱をたて事業を実施している。現在は、イタリア隊によるナンディン祠堂修復、フランス隊による管理計画に対する支援がおこなわれていると同時に、インド隊による協力支援計画もあると聞いている。

プレア・ヴィヒアについては、1901年、1907年の文献に図面がでていいるが、ワット・プーと同様に、本格的に図面が描かれたのは、パルマンティエによる調査である。現在は、フランス極東学院のブルギエ氏が作成して、ウェブサイト上で公開されている図面が最新だと思われる。遺跡については、少なくとも90年代まではほとんど手がつけられていいなかったが、それ以降徐々に訪問が可能となっていた。しかし、現在はまたアクセスがしにくい状況である。

・プレア・ヴィヒアへのアクセスについては、非常に情報が錯綜している。政治的に非常に難しい遺跡だとは思いますが、タイとの協力はいろいろな意味で必須だと思う。また、草の根レベルでの協力も行われるべきである。ワット・プーについては、現在日本国政府アンコール遺跡救済チームの下田氏がイタリア隊に参加している。

・ナンディン祠堂については、現在イタリアが進めている修復と成田氏によって提案された修復計画が違うとのことだったが、どう違ったのか。

→ 従来の修復計画では、南側半分の地盤沈下が主要な問題であったため、南側半分のみ解体し、北側はできるだけ手をつけずに計画だった。しかし、現在の修復計画では北側から手を付け、全て解体・再構築するようである。

・聖水遺構については、アンコール遺跡群でも出土しているという。先日、インドがタ・プロム寺院でトレンチレス技術というやり方での排水計画を発表した。一応、この技術によりオリジナルの排水システムが保存されるということだが、やはりオリジナルの排水システムを破壊する可能性があると思う。

・プレア・ヴィヒアについては、2008年の世界遺産委員会で登録されたが、その直後から国境紛争が断続的に続いていた。2009年6月の世界遺産委員会では登録後の状況について保全状況(SOC)の項で議論される予定である。この遺跡については、ユネスコの注目度が高く、今後国際調整委員会が設置されるという可能性も聞いている。

2. タンロン皇城遺跡保存に関わる協力について

報告1: 現在、国会議事堂建設用地内での発掘調査が進められているが、情報提供はなく、その詳細は不明である。中軸区域については、既にイル・ド・フランス派遣専門家の計画に基づいて整備が進められている。敬天殿跡の周辺では、年初から考古学院による発掘調査が行われている。2009年3月訪越時は、ベトナム側との協議と、D2およびD3区における遺構再精査を実施した。環境観測についても1年間分のデータがそろったので、今後分析にとりかかりたいと考えている。2009年度からは、科研費基盤A「タンロン皇城遺跡の保存活用に関する包括的調査研究」が採択されたため、これにより日本側の調査研究を始める予定である。(友田正彦)

報告2: 信託基金については、ユネスコにおいて粛々と進んでいる。また進行状況をお知らせする。(外務省)

報告3:2009年4月に現地へ渡航した際、遺構全体の解釈についてのベトナム側との認識が徐々に当方と近づいてきたと感じた。また、どのような建造物が建っていたのか検討するため、6月17日にはタンロン建築班の研究会を発足し、発掘された遺構の上にかつて建てられていた建造物についての検討を始めている。(上野邦一)

報告4:6月11日にコーロアセンター副所長と面談してきた。2010年10月10日に予定されている千周年記念祭に関する現在の準備状況については、まず、世界遺産登録のための法整備が進行中であるという。式典のため、国防省からの土地の返還も進んでおり、その土地において式典を開催するとのことである。ハノイ市が中心的に動いているが、国家レベルの式典として進んでいる。その内容としては、仏教式の法要、タンロン遺跡遺物展示会、写真展覧会、盆栽鑑賞会など、様々な催し物が考えられているとの情報である。(坪井善明)

報告5:6月ハノイにおいて、日本建築学会の2009年建築計画委員会春季学術研究会「ハノイの変貌:歴史・環境・共生と建築計画」が開催された。主要なトピックとしては、「ベトナムにおける1975年以降の近代建築」、「ハノイ39」についての議論がおこなわれた。参加者は、ホアンジャウ18番地遺跡、ドウオンラム村を訪問した。特にタンロン皇城遺跡についての言及はなかったが、今後建築計画研究所が絡んでくるとなると、関係があると思う。(布野修司)

3. 被災文化遺産復旧に関する調査について

七海 由美子(文化遺産国際協力コンソーシアム)

報告:文化遺産国際協力コンソーシアムでは、2009年度に被災文化遺産復旧に関する調査を行う予定である。近年、自然災害による被災文化財に対する復旧支援への要請が多くある状況を受けて、実際の事例をいくつかとりあげ、各国の防災体制、災害後の復旧対応、日本を含めた各国による国際協力実施状況などについての調査を行う。最終的に、日本による国際協力実施のあり方についての提言も盛り込んでいく予定である。内容については、5月8日の企画分科会において検討され、最終的に中国、タイ、インドネシアを対象とすることが決定された。また、その他にも2カ国に対する調査が予定されており、これについては、現在公募中である。各国についての報告書を作成した後、5カ国の報告書をまとめた形の報告書を作成し、成果については2010年度の研究会などの場で報告していきたいと思っている。

・東京外国語大学では、インドネシアのスマトラ島沖地震・津波にともなう文字文化財被災に関する支援に関わってきたが、この自然災害は地震と津波があわさった災害ということで、文字文化財にとって非常に難しい状況であった。アチェ文字文化財復興支援室では、その支援に際して、災

害のあり方、現地への入り方、災害後の支援など、学ぶことがあったので、これら経験がコンソーシアムの調査に役に立つようだったら協力したい。アチェについては、政治的状况により、比較的早く国際的枠組みができていた。アチェ・ニマス復興庁から資金がだされ、国際アチェインド洋研究所が設立された。そこにイギリス、オーストラリア、シンガポール、オランダ、トルコ、日本が関わるといふことで、情報交換がなされている状況である。(宮崎恒二)

4. 文化遺産情報資源共有化ワーキング・グループについて

田代亜紀子(文化遺産国際協力コンソーシアム)

報告:2009年1月に開催された第11回東南アジア分科会において、フランス極東学院がカンボジア政府と実施している CISARK への協力について依頼があった旨ご相談した。これに対して、これまでアンコール遺跡に対する協力は様々な形でおこなわれてきたものの、その成果の情報化、収集、蓄積、公開などについてはこれまで話し合っただけで進められなかったという問題が指摘された。まずは、それら文化遺産情報資源の共有化についての議論の必要性から、新しいワーキング・グループの立ち上げが提案された。これを受け、東南アジア分科会委員である柴山守教授(京都大学)が中心となり東南アジア分科会のもと、文化遺産情報資源共有化ワーキング・グループが立ち上げられた。6月24日には準備会合開催が予定されており、そこで具体的な年度スケジュール、メンバーなどについて検討される予定である。ワーキング・グループ活動については、東南アジア分科会で随時報告する。

5. その他

- ・第5回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産保存の国際動向」開催案内
- ・講演会「文化遺産国際協力の今後の展望」松浦ユネスコ事務局長講演開催案内

以上

* プレア・ヴィヒアについては、クメール語表記では「プリアハ・ヴィヒア」となるが、本議事録では新聞用語として普及している「プレア・ヴィヒア」を使用した。